

平成 22 年 5 月 24 日現在

研究種目：基盤研究 (C)

研究期間：2007～2009

課題番号：19520607

研究課題名 (和文) 中国農村慣行調査を再々訪する：華北農村100年史の
研究蓄積の世界への発信に向けて研究課題名 (英文) A Resurvey of the "Kanko Chosa" villages in North China: Presenting the results
of a Century of North China Village History to a global audience

研究代表者

Grove Linda (グローブ リンダ)

上智大学・国際教養学部・教授

研究者番号：20296891

研究成果の概要 (和文)：

本研究プロジェクトの目的は次の2つである。第1は、1990年代に日中の研究者と共同で行った実地調査の追跡調査を行うことである。第2は、日本の研究者が、華北の農村数ヶ所で100年近くにわたり行ってきた調査研究の貴重な成果を、国際的に発表することである。本研究プロジェクトで行った調査は、革命前後に農村に生じた慣行の変化、また農村での共同生活がどのように再編されたのか、そしてそうした変化が個人や家族の生き方にどのような影響を与えたのか、といった問題について豊富なデータを提供するものである。

研究成果の概要 (英文)：

This project had two purposes: first, to follow-up on studies done as part of a collective research project with Japanese and Chinese scholars in the 1990s, and second, to present the important results of almost a century of Japanese-study of several North China villages to a global audience. Our surveys provide rich data to explore the relationships between pre-revolutionary customary practices and revolutionary change and to examine how different villages reorganized community life and the impact of that reorganization on individual and family aspirations and strategies.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2008年度	700,000	210,000	910,000
2009年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	2,300,000	690,000	2,990,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・東洋史

キーワード：中国、農村、都市化、社会主義、経済発展、社会変化、華北、慣行調査

1. 研究開始当初の背景

1930年代後半から1940年代初めにかけて、日本の研究チームが華北の農村地帯で大規模な慣習法の調査を行った。調査の結果は『中国農村慣行調査』として1951年から1958年にかけて出版された。6巻に及ぶこの資料には、現地の役人や村長、地主、農民への何百もの聞き取り調査記録が含まれている。この慣行調査は、共産党政権成立前夜の華北農村地帯での社会的、経済的、および文化的な動向を知るための最も重要な資料となっている。日本国内では、この資料を基にして現在までに複数の書籍と50以上の学術論文が出版されている。英語圏でもRamon Myers (1970)、Philip Huang (1985)、Prasenjit Duara (1988)などの著名な学者によって、主としてこの資料に依拠した書籍が刊行されている。研究代表者も『中国農村慣行調査』を研究対象とする研究会に1981年より所属している。この研究会は1990年度に研究助成金を取得し、天津にある南開大学の研究者とともに、これらの農村を再調査した。調査は1995年に終了し、その結果は3巻にわたる調査記録(三谷1993、1999、2000)とともに、一般読者を対象とした本(三谷他2000)として発表されている。

2. 研究の目的

20世紀を通じて、中国の農民の生活は、戦争、革命、政治運動、あるいは社会主義建設を目的とする国家政策といった、村落共同体の外部からの力により変容を遂げてきた。こうした変化がもたらした影響についてはさまざまな研究がなされてきたが、そうした研究は主に国家・地方レベルのものであり、農村での個人々の生活にどのような影響があったか、また農村住民がこれらの出来事をどのように理解しているかを解明するのはより困難な作業である。1940年代に行われた調査や、1990年代に実施された日中共同での再調査は、国家レベルで生じてきた変動や政策と、農民の生活史との相互関係について、ほぼ100年にわたる豊富なデータを提供している。しかし、これらの資料は日本語でしか入手できず、欧米やその他の地域の研究者の多くは、これを利用できずにいる。本研究プロジェクトの目的は、1990年代に収集された資料を追跡調査によって補完・更新した上で英文書籍の形で刊行し、研究代表者自身、また日中の研究協力者が得てきた知見を広く国際的に発表することである。1990年から1995年にかけて行われた現地調査では、1949年の革命から1995年までの約50年間

に、これら5つの農村でどういった変化が生じてきたのかということについて大量の資料を収集することができた。しかし、経済改革の進展にともなって、研究対象としてきた農村にも急速な変化が生じてきた。したがって、本研究の第1の目的はこれらの農村を再訪し、1995年以降に生じた変化を見極めることにあった。また第2の目的は聞き取り調査で集めた資料を補足し、また聞き取り調査で得た情報の背景をつかむために、地方の公文書を収集することにあった。

3. 研究の方法

本研究プロジェクトには4つの課題があった。第1は、研究対象である村々を再訪し、過去10年間に生じた変化について、村の役人から聞き取り調査を行うことである。第2は、それぞれの村がある県での、村々に関する公文書の収集。第3は、中国農村史や農村の変化について最近行われた研究(中国語、英語、日本語での二次資料)の収集と分析。第4は、本研究から得られた結果について、農村社会史を研究している中国の研究者と意見交換を行うことである。第1と第2の課題は天津社会科学院の研究協力者の協力を得て遂行された。また、第4の課題については、天津の研究者らと定期的な意見交換、中国地域史や中国社会史関連の学会への参加、論文発表等を行った。

4. 研究成果

本研究プロジェクトでは、1990年代から1995年にかけて行われた現地調査に新しいデータを加え、日中共同研究の成果を国際的に発表していく準備を行った。以下では、研究対象となった農村への再訪、公文書の収集・分析、最近発表された研究文献の分析等から得られた結果を手短かに記し、この共同研究で得られた結果を発表するにあたり、研究代表者がどのような手法を用いるかについて簡潔に説明していきたい。

(1)本研究プロジェクトの初年度には、中国の研究協力者と、研究代表者らの研究会に所属する別の日本人研究者の1人とともに、研究対象である4つの農村を再訪した。2000年には、研究会に所属する研究者らが共同で執筆した『村から中国を読む』という書籍を発表したが、ここでは研究会がそれまで行ってきた農村研究の結果が要約されている。その時点では、研究対象の各農村の発展について、暫定的な結論しか得られていなかった。こうした農村を再訪した理由の1つは、これらの村々が同書で予測したような形で発展を続

けているかどうかを確認するためであった。それぞれの村はまったく異なる発展を遂げてきたため、各村で得られた結果について手短かに記しておきたい。

①北京市順義区沙井村：過去 20 年間における北京の急速な拡大は、次第に沙井村にも影響を及ぼしていった。かつての沙井村は穀物栽培を主とする貧しい農村であった。2007 年夏にこの村を再訪した際、村の土地全体が高層アパート群建設のために収用され、村人にはアパートの部屋が与えられていた。若者は皆、農業以外の仕事に従事しており、中年男性はタクシー運転手になっていた。また、年配世代は土地収用の際に余分にもらったアパートの部屋を貸したり、売ったりして生計を立てていた。年配の村人は自分たちのことをまだ「沙井の人間」と考えていたが、若者は新しい都会人としての意識をもっていた。

②天津市静海県馮家村：2008 年 2 月にこの村を再訪した時、村の外見は 10 年前とほとんど変わっていないように思えた。馮家村は主要都市の郊外に位置する村の 1 つであるが、都市化の波が及ぶには距離が離れている。村人は都市に出荷する野菜の栽培を仕事としており、農業で十分な収入が得られることから、都市部に移住しようとする者は少数である。また、規模は小さいが、非常に近代的な自動車部品工場が 2 つできていた。工場の従業員のほとんどは村の出身者ではないが、工場は村のインフラ整備に大きな役割を担っている。村の外見はほとんど変化していなかったが、家の中は近代的になっており、最も裕福な村人の家には高速インターネット回線が設置されていた。

③河北省欒城県寺北柴村：寺北柴村は県人民政府の所在地（県城）近くに位置し、河北省の省都である石家庄から約 50 キロほどの所にある。村には非常に新しい二階建ての住宅が建ったり、団地を建てた住宅開発業者に村の土地の一部を売却するといった変化がみられたが、発展のパターンは 1990 年代に調査を行った時と似通っていた。村の世帯のほとんどは農業以外の仕事で主に生計を立てており、運輸業、小規模の製造業、商業等の仕事に従事していた。1990 年代から始まった小規模の商工業は規模が拡大し、1990 年代に養豚業を営んでいたある女性企業家は、電気設備工事会社を設立して大きな収入を得ていた。

④山東省平原県後夏寨村：後夏寨村は山東省北西の貧しい地域に位置しており、従来通り農業に頼っていくと思われたが、この予想はずれることになった。2008 年 2 月にこの村を訪れてみると、働き盛りの者はほぼ全員出稼ぎに出ている。村は年配の世代とその幼い孫たちの住まいになっていたのである。村

にはいくつかの家具工場ができており、地元の人々と、他の地方の出身者が混じって働いていた。年配の人々の育児の負担を軽くするために、民間の保育園も 4 つほどできていた。

(2)本研究プロジェクトの 2 つ目の主要課題は、各村で行った聞き取り調査を補足するための文書資料を収集することであった。公文書に関する中国の法律では、30 年以上経過した公文書の利用が許可されている。すべての地方の公文書保管所があらゆる規則を順守しているわけではないが、10 年前と比べれば、地方の公文書は格段に利用しやすくなっていた。ほとんどの県では、1970 年代までの資料をコピーすることができた。そのため、毛沢東政権時代に行われた重要な大衆運動や政治運動（農業集団化、大躍進、60 年代の調整政策への転換、四清運動、文化大革命、人民公社の解体等）に関する資料を多く入手することができた。これらの資料からは県レベルでの重要な動きを読みとることができ、それぞれの村で生じた出来事を理解する背景を得ることができる。

(3)1990 年代に共同研究を開始した時、中国側の研究者のほとんどは、研究代表者らのグループが行っていたミクロレベルでの農村史研究に興味を示さなかった。だが、過去 10 年間に、歴史学者、社会学者、人類学者等を含む中国人研究者グループのいくつかは、1949 年以降の農村史研究を始めている。研究代表者は、中国人若手研究者が現地調査と文書資料の分析を基に、農村生活のさまざまな側面やその変化を考察した研究書を数多く収集してきた。これらの研究書からは、研究代表者らが研究を行ってきた村々との違いを比較検討するのに有益な、他の農村に関するデータを得たり、分析方法や研究成果の発表方法に関する面でヒントを得ることができる。

(4)2000 年に一般読者向けの本を刊行した際、この本に「村から中国を読む」というタイトルをつけたのは、20 世紀に生じた大きな変化を国家レベルからみるのではなく、村という非常に低い視点からとらえたかったからである。それ以前にも、研究代表者らはすでに二冊の分厚い調査記録を刊行しており、その中には現地での聞き取り調査から得られたデータも入っている。戦前から行われていた元々の慣行調査や、1990 年代に研究代表者らが同農村で行った調査の長所の一つは、個人や家族のライフストーリーを明らかにしていることである。現在取り組んでいる英文書籍では、聞き取り調査で得られた資料を読めない外国の読者に配慮して、テーマ別（土地改革、集団化、政治運動、ジェンダー問題、村落共同体、家庭と結婚、若者の教育、農村における指導層、経済生活、儀礼）に章を分けて分析を行うとともに、各村で重要な役割

を担っている人物の物語を紹介していくつもりである。このような方法をもちいることで、外国の読者にもこの本に含まれている資料の豊富さをじかに感じ、また各農村の共同生活の中で重要な役割を担っている人々を、人間的なレベルからとらえてもらいたいと考えている。研究代表者はすでに全資料を読み返しなが、各テーマに組み込まれる個人のライフストーリーを選別し、原稿をまとめる作業を始めている。この作業は 12 ヶ月から 18 ヶ月ほどで完了する予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 1 件)

① Grove Linda, “Transition to Socialism in a Small Jiangnan Town: Reflections on 「1949 年前後の中国」,” 近きに在りて、査読無、53 号、2008 年、100-125 頁

[学会発表] (計 5 件)

① Grove Linda, “Patterns of Change in 20th Century North China Rural Society,” 『中国社会科学院近代史研究所特別研究会』、2009 年 8 月 24 日、北京

② Grove Linda, “Social Change in 20th Century North China,” 『断続と連続：金元時代以来の華北の社会文化：国際学術討論会』、2009 年 8 月 22 日、南開大学、天津

③ Grove Linda, “Reconsidering 20th Century North China Rural History,” 『明清以来の地域発展と近代化の過程：国際学術討論会』、2009 年 8 月 18 日、天津社会科学院

④ Grove Linda, “North Chinese Markets and Market Control Mechanisms in China,” XVth World Economic History Congress, 2009 年 8 月 4 日, Utrecht, Netherlands

⑤ Grove Linda, 「アメリカの最近の中国研究」、『天津社会科学院歴史研究所月例研究会』、2009 年 2 月 24 日、天津

[図書] (計 4 件)

① 顾琳 [Grove Linda], 『中国的經濟革命：二十世紀的鄉村工業』、江蘇人民出版社、2009 年、全 311 頁

② グローブ、リンダ, 飯島渉、久保亨、村田雄二郎編『シリーズ 20 世紀中国史 第四卷：現代中国と歴史学』、東京大学出版会、2009 年、121-151 頁

③ グローブ、リンダ, 長野ひろこ、松本悠子編『ジェンダー史叢書 第六卷：経済と消費社会』、明石書店、2009 年、140-157 頁

④ 谷洋之、グローブ、リンダ編『トランスナ

ショナル・ネットワークの生成と変容：生産・流通・消費』、上智大学出版、2008 年、3-27 頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

Grove Linda (グローブ リンダ)

上智大学・国際教養学部・教授

研究者番号：20296891

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：